様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　５ 月 ２６ 日現在

機関番号：１７２０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００３５６

研究課題名（和文）唐宋の文人における趣味・嗜好に関する研究

研究課題名（英文）A Study of Hobbies and Tastes of Literati in the Tang and Song Dynasties

研究代表者
谷口　高志（TANIGUCHI, Takashi）

佐賀大学・教育学部・准教授

研究者番号：１０６１３３１７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、従来「文人趣味」として一括りにされてきた趣味・嗜好の問題を扱い、その営みにどのような意義や価値が見出されてきたかを、唐宋の文学作品を通して考察した。趣味的生活が活発化する中晩唐期について主に検討し、文人たちが自己と他者を差別化するものとして嗜好を捉え、その営みを通して自身の個性を主張しようとしていたこと、また嗜好の営みにそのような重要な価値が見出された背景として、当時における社会構造の変化が指摘しうることを論じた。あわせて中唐を代表する文人・白居易の音楽趣味に関する詩文について個別に分析を行い、彼がその楽しみ方を通して、自らの固有性を緻密に表現しようとしていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
詩歌や書画などに没入する中国文人の生活スタイルは、いつどのように発生し、いかにして定着したのか。本研究は、文人趣味の萌芽期とされる中晩唐期の文学作品を通して、この問題の解明を試みたものであり、趣味・嗜好の営みを、文人の自意識に関わる重要な問題として捉えた点、その営みを当時における社会構造の変化と結びつけて考究しようとした点に、大きな学術的意義があると考えられる。また趣味・嗜好は、現代においても自己のアイデンティティを映す鏡として意識されているが、本研究は趣味・嗜好の持つそうした普遍的な機能や役割を、前近代の中国に遡って探求するものであったといえ、その意味において少なからぬ社会的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：In this study, I dealt with the issue of hobbies and tastes, which have been lumped together as "literati taste," and analyzed their significance and value through literary works from the Tang and Song dynasties. Focusing on the middle and late Tang, when hobbies became particularly popular, I argued that literati considered tastes as a way to differentiate themselves from others and tried to assert their individuality through such activities, and that changes in the social structure of the time can be pointed out as the background to the discovery of such an important value in the activity of tastes. I also analyzed the musical tastes of Bai JuYi, one of the most famous literati of the Middle Tang, and clarified that he was trying to express his uniqueness in detail through his activities.

研究分野：中国文学

キーワード：趣味　嗜好　偏愛　日常　個性　文人　中唐　白居易

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

中晩唐期の文人たちは、日々の生活において詩歌の創作や、書画・音楽の鑑賞、飲酒や喫茶など、己の好尚のままに様々な営みに耽るようになり、そうした営みは文学作品の主題としても盛んに取り上げられるようになる。文人趣味の萌芽期と呼ばれるこの中晩唐期に、風雅な日常を楽しむ文人特有の生活スタイルが定着しだし、宋代以降へと継承されていくこととなるのだが、ではなぜ中晩唐期に到って趣味・嗜好を謳歌する生活が、理想的な生のあり方としてクローズアップされることとなったのか、彼らにとって嗜好に耽ることは、いかなる意味を有していたのか。

従来の研究では、こうした趣味・嗜好の問題は、詩人研究の枠内において個別に論じられることが多く、唐代全体を視野に入れて各々の文人に通底する意識を掘り起こそうという試みは、充分にはなされてこなかった。そうした状況を踏まえ、筆者は論稿「愛好という病――唐代における偏愛・偏好への志向――」において、嗜好に対する意識や捉え方そのものが、この時期に大きな変化を遂げていたことを指摘した。本研究はその論を承けつつ、趣味・嗜好が文人たちの自意識の形成と展開に関わる重要な営みであったことを問い直すものである。

２．研究の目的

本研究は、従来、文人趣味として一括りにされてきた趣味・嗜好の問題を扱い、その営みにどのような価値が見出されてきたかを、唐および宋の文学作品を通して考察する。特に趣味・嗜好が持つ社会的な意義や役割に着目し、その営みが文人たちのアイデンティティと密接な関係にあったことを丹念に追跡していく。文人趣味という生活スタイルの背後には、嗜好を〈自分らしさ〉の標識として他者に示そうとする意識が潜んでいたと思われ、そこには風流の追求という観点だけでは説明できない、重要な社会的意義が見出されるはずである。

３．研究の方法

本研究は、中晩唐期から北宋中期までの文学作品を考察の対象とし、趣味・嗜好がどのように捉えられているかを仔細に見ていき、その活動が文人たちの自意識とどのような関係にあったのかについて検討していく。

（1）先ず、唐代のなかでも趣味的生活が特に活発化する中晩唐期について考察を行なう。趣味・嗜好について言及した詩文を広く収集し、整理する。その分析を通して、趣味・嗜好が有していた社会的機能と、それを介した文人たちの自己表現（〈個〉の標榜）の様相を浮き彫りにし、併せてその社会的背景について考究する。

（2）続いて北宋中期について考察を進め、嗜好品の蒐集と譜録の編纂などに象徴される物への志向が、趣味・嗜好を介した文人たちの自己表現のあり方をどのように発展させていったのか、を具体的に検証する。

４．研究成果

前項３（1）について研究を行ない、その成果として二篇の論文を発表した。①「偏愛する文人たち――中晩唐期における嗜好への傾倒と個の標榜――」、②「白居易の音楽愛好――詩文に語られる感性と嗜好――」がそれである。

①では、中晩唐期の文人たちの嗜好をめぐる意識について、他者との関係性という観点から考察を加えた。嗜好への没入を詠った中晩唐期の詩文には、自らの営みに対する他者の反応がしばしば記されている。また自身の嗜好を他者のそれと比較し、自らの営みの特異性を主張しようとする姿勢も強く窺える。これらのことは、嗜好への没入が、対他的な行為（他者への意識を孕んだ行い）であったこと、嗜好の営みを通して他者と異なる〈自分らしさ〉が主張されていたことを示唆している。文人たちにとって、趣味・嗜好は自己と他者を差別化し、自らの〈個〉を担保する営みとして認識されていたと思しい。また、そのような認識が発生した社会的要因としては、当時における、新興の文人官僚層と旧来の貴族階級の対立が指摘しうる。趣味・嗜好への傾倒は、貴族層と対峙する寒門出身の文人官僚たちにとって、ある種のステータス・シンボルとして機能していたと想像される。文人官僚たちの内面には、貴族階級（富裕層）への対抗意識があり、彼らが実利を伴わない詩歌や書画に没頭するのも、当時なお一般的であった財力や権力を中心とする価値観にアンチテーゼを示すためであったと考えられる。

以上のような知見を述べ、文人たちの趣味・嗜好が、単に風流の追求のために行なわれていたのではなく、自己と他者の関係のなかで営まれていた社会的な行為であったことを明らかにした。併せて、そうした趣味・嗜好の捉え方の発生を、当時における社会構造の変化と結びつけ、文人趣味と呼ばれる生活スタイルが、なぜこの時期に発生し、定着したのかという問題について、従来指摘されてこなかった観点から、大きな見通しを示すことができた。

②は、①を承けつつ、趣味・嗜好が文人たちの〈個〉を象徴するものとして意識されていたことを、個別の事例に即して具体的に検討したもの。中唐・白居易の音楽趣味に関する詩文を取りあげ、それらを〈演奏と吟誦〉、〈社交と競争〉、〈選択と偏愛〉の類型に分けて考察し、白居易が自らの感性と嗜好を介して、どのように〈自分らしさ〉を表現していたのかを論じた。そこで得られた知見は、主に以下のようなものである。

白居易の音楽趣味とは、自らの身体に快楽を循環させようとする、自己回帰的・自己完結的な

面を持つ一方で、対他的（社会的）な営みとしても機能していた。彼は音楽を通して他者と交流し、競い合い、自らの感性の洗練を積極的に示そうとしている。またその営みは、細部にわたる選択と偏好を繰り返していくことで、自分だけの楽しみを創造し、自らの固有性をきめ細かく表現することにもつながっていた。白居易はどの曲を、いつどこで、どのように楽しみ、それをどのようなかたちで感じ取ったのか、を克明に詩文に記している。彼は自身の音楽への愛好を、自分がどのような人間なのかを示す一つの標識として捉えており、その営みを詠うことで、自己の像を具体的に作品に描き出そうとしていたと考えられる。音楽の楽しみは、中唐の白居易に至って、自らの固有性を緻密に、また複雑に表現する具として、高度に磨き上げられることとなったのであり、そうした彼の営為は、後世における文人趣味、即ち生活スタイルそのものの藝術化を図る志向の先駆けとして、極めて大きな意味を持つといえる。

なお、この②の論について考察を行い、資料を精査していくなかで、趣味・嗜好に対する認識だけでなく、それを楽しむ具体的な生活スタイルのありようのなかにも、従来にない新たな価値観が種々潜んでいる可能性に気づかされた。たとえば中唐の文人たちは、白居易が特にそうであったように、ただ無為に遊びに耽っていたわけでは必ずしもなく、趣味生活を自らの意思である程度、様式化・規範化しようと試みていたと思われ、彼らはいわば〈管理された自律的な日常〉のなかで〈勤勉な遊び〉にいそしもうとしていたように見受けられる。また音楽を始めとする諸々の嗜好の楽しみを、精神的なものとしてではなく、身体的、知覚的なものに還元して受容しようとしたところも、中唐期の文人において特徴的だと思われる。中唐文人の趣味生活に見られる、こうした傾向は、当時における〈苦吟〉の流行や、〈苦学〉の気風とともに、近世的な新たな生活意識の発生を、すなわち努力や勤苦を厭わず、自らの身体性を前面に押しだそうとする、平民的な価値観の胎動を示唆しているのではないだろうか。今後は、本研究の成果を踏まえ、こうした問題について考察を進めていくことを計画している。刻苦勉励を尊び、自らの肉体で感じることに重きを置く生活様式の発生について検討し、六朝以来の貴族的な価値観が、中唐において平民的なそれへと大きく転換しつつあったこと、またそうした新たな価値観を体現するものとして、〈日常〉がクローズアップされ、文学の題材となったことを明らかにしていきたい。

前項３（２）についても研究を進め、趣味・嗜好の捉え方や、その営みを介した自己表現のあり方が、中晩唐期を経た北宋期において、どのように展開していったのかについて、おおまかな展望を得ることができた。宋代文人の趣味・嗜好のあり方として、特に注意されるのは、嗜好品の蒐集（書画、文房具、花卉草木、石など）が流行するとともに、それらに関する譜録（『集古録』『硯譜』『洛陽牡丹記』など）が盛んに編纂されるようになったことである。北宋中期の欧陽脩らの詩文のうち、蒐集の営みに関連する作品（譜録を含む）について調査を行ない、文人たちの趣味生活が物に依存しだし、嗜好品を中心とする営みによって〈個〉が主張されるようになったこと、また文人間において物の価値の開拓と創造が不断に競われ、それが共有されることで新たな流行が生み出されるようになったこと、そのなかで価値を見分ける感性の洗練が、唐代より更に重んじられるようになったこと、などの知見を得ることができた。今後は欧陽脩らの記を扱った論考の発表を予定しており、それをもって、趣味・嗜好に関する唐宋文人の意識の解明を目指した本研究のひとまずの総括としたい。特に中晩唐から宋代にかけて、山林の泉から採取される水とその味が珍重されるようになったことに着目し、嗜好品の価値が人為的に付与され、創造されていく過程を具体的に検証し、併せてその探索と弁別に寄与するものとして、人間の感性の価値が大きく注目されだしたことについて論及したい。

以上のほか、本研究に付随する成果として、③「中唐期の詩歌における祭祀と龍――龍を斬る詩人たち――」、④「唐代文人と辺地の神――白居易の祝文を中心に――」の論考を発表した。これらは唐代、特に中唐期の詩文のなかに、しばしば民間の祠廟や祭祀が詠われていることに着目し、それらの詩文について考察を加えたもの。その考察を通して、当時の文人たちが祭祀や神霊の問題に対し、いかなる意識や観念を抱いていたのか、また神霊の世界ひいては現実の世界に対して、彼らがどのような問題意識を有していたのかを論じた。

③は、当時急速に流行しつつあった龍神信仰に関する詩歌を精査し、その信仰がしばしば淫祀として批判の対象とされていること、またその淫祀の蔓延を受けて、朝廷への諷刺がなされていることなどを指摘した。その上で、当時の文人官僚たちが、民間における祭祀の乱れを、王権の失墜や、朝廷の混乱の象徴として捉えており、彼らがそうした現状への危機感から、邪悪な龍を駆逐せんとする夢想や願望を、盛んに唱えていることを論じた。

また④では、唐代の祝文（神に捧げる祝辞）、特に中唐・白居易のそれを取りあげ、地方に赴任した文人たちが、その地の卑俗な祭祀に深く関与する一方で、ときに神霊に攻撃的・挑発的な態度を見せることについて考察した。その考察を経て、朝廷の権威と辺地の神霊の間で板挟みになった、唐の地方官特有の複雑な葛藤が、神霊への怒りや反発の感情となって祝文作品に表われていることを述べた。

これら③④の論考は、趣味・嗜好という私的な時空を対象とした本研究課題とは、必ずしも直接結びつくものではないが、本研究課題を進めていくなかで得られた視点、すなわち中唐期をいわゆる唐宋変革の過渡期とみなし、その時期の文学のなかに、新たな観念や価値意識の萌芽を読み取るという視点を援用することで、より豊かな成果を得ることが可能となったといえる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 谷口高志	４．巻 20
２．論文標題 白居易の音楽愛好――詩文に語られる感性と嗜好――	５．発行年 2020年
３．雑誌名 白居易研究年報	６．最初と最後の頁 76-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷口高志	４．巻 5
２．論文標題 唐代文人と辺地の神――白居易の祝文を中心に――	５．発行年 2021年
３．雑誌名 佐賀大国語教育	６．最初と最後の頁 29-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷口高志	４．巻 26
２．論文標題 中唐期の詩歌における祭祀と龍――龍を斬る詩人たち――	５．発行年 2019年
３．雑誌名 中唐文学会報	６．最初と最後の頁 44-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 谷口高志	４．巻 56
２．論文標題 偏愛する文人たち――中晩唐期における嗜好への傾倒と個の標榜――	５．発行年 2018年
３．雑誌名 九州中國學會報	６．最初と最後の頁 16－30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 谷口高志
2．発表標題 神と戦う地方官――唐代の祝文に見られる神への怒り・反発・諧謔――
3．学会等名 第71回東洋史学研究会（日台中国史研究者交流会）（国際学会）
4．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関